

三 重 県 桑 名 市

西金井遺跡発掘調査報告書

埋 蔵 文 化 財 整 理 所

1993. 3

桑 名 市 教 育 委 員 会

序

本書は、ほ場整備に伴う西金井遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。西金井遺跡は、従来から埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡でしたが、その規模・遺跡の性格等不明でした。今回は、排水路となる部分のみの発掘で、住居跡は発見されませんでした。遺物が多く出土し、この遺跡の時期や性格を決定する貴重な手懸りの一端を得ることができました。

西金井遺跡を含む金井地区は、白鳳時代の寺院であった縄生廃寺（三重郡朝日町）とは山続きに位置し、古くから開けた土地ですが、その実態は明確ではありません。本書がその解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力・ご理解をいただいた土地所有者の皆様、発掘のご指導を賜りました方々や関係機関、発掘作業にたずさわっていただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月31日

教育長 鈴木 鉦 次

例 言

1 本書は、下新田蓄土地改良事業に伴い、発掘調査を実施した三重県桑名市西金井字高添の「に金井遺跡」の調査結果をまとめたものである。

2 発掘調査は、平成4年度国庫補助金、県費補助金の交付を受けて実施した。

3 調査体制（敬称略）

調査主体 桑名市教育委員会

調査指導 三重県教育委員会事務局文化部文化振興課
三重県埋蔵文化財センター

調査担当 渡辺尚登（三重県四日市工業高等学校定時制教諭）
斉藤 理（愛知学院大学大学院生）
水谷芳春（立正大学生）

調査協力 山崎恒哉（三重県立桑名北高等学校教諭）
三枝義久（三重県立桑名西高等学校教諭）
鈴木克彦（三重県立桑名西高等学校教諭）
陰山誠一（員弁町教育委員会）

4 出土遺物の整理は、愛知学院大学考古学研究会（顧問大参義一教授）の協力を得た。

5 報告書の作成は、渡辺・斎藤・水谷が担当した。

6 本書で用いた方位は、図版3のみ磁北を示す。

7 本書で使用した遺構略記号は、次の通りである。

S D ; 溝・旧河道 S Z ; その他不明

目 次

第1章 前 言

1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 遺 構	3
第4章 遺 物	4
第5章 まとめ	8

表目次

第1表 調査区内場所別層序表	3
第2表 出土遺物一覧表	6

図版目次

図版1 遺跡位置図	9
図版2 遺跡地形図	10
図版3 遺構平面図	11
図版4 調査区南壁土層断面図	12
図版5 サブトレンチ土層断面図	13
遺物実測図(1)～(6)	14
写真(1)～(5)	20

第 1 章 前 言

1 調査に至る経過

桑名市は、三重県の最北端に位置する市で、木曾三川と伊勢湾の水運によって早くから開けた土地である。西金井遺跡は、桑名市の南端、三重郡朝日町に隣接する西金井字高添に所在する遺跡で、周知の遺跡であったが、規模や時代・遺跡の性格は不明であった。

平成 3 年度より桑部下新田地区で約 20ha に及ぶ下新田蓄土地改良事業が行われることとなり、平成 3 年 10 月、1.5 m×4 m のグリッドを 14 ケ所設置し、試掘調査を実施した。その結果、遺構に直接影響を及ぼすと思われる排水路部分約 400 m²を平成 4 年度に発掘調査を行うこととなった。また、功二による掘削が浅く、遺跡に影響が無いと判断した排水路部分約 420 m²を、立会調査とすることとした。

2 調査の方法と経過

今回は、当遺跡に幅 2～3 m、南北約 140 m の長さのトレンチをいれる形の調査となった調査は 10 月 21 日より開始し、調査区西端からまず重機による掘削を行った。約 80 cm 掘下げた褐色土の面で、調査区を斜めに横切り、暗褐色の埋土に多くの遺物を含む溝状の遺構と考えられるものを検出した。この溝状遺構にサブトレンチを入れたところ、やや下から遺物の集中するところにあたり、溝であると確信した。しかし、トレンチを褐色土の面まで拡張して、断面を確認すると、埋土と思った暗褐色の土が褐色の土の下に潜り込んでおり、遺構ではないと判断せざるをえなかった。この褐色土面を検出面とし、調査区の中ほどへ掘削を続けると、多くの遺物を含む砂質系の面が変わった。調査区東側でも重機による掘削を始めた。ちょうど U 字溝の下でかなり荒れていたが、褐色土の面で調査区と平行する溝らしい肩の線が引けた。直行するサブトレンチを入れると、断面でも浅いが、溝の一部と考えられるものが確認できた。しかし、このサブトレンチを下げると、西端と同じ暗褐色の土が認められた。さらに下層の遺構も考えられたので、残された調査の予算や期限を考慮し、この面での遺構検出は放棄して、重機で暗褐色の土の面まで下げることにした。その後は調査区と直交するサブトレンチを必要と思われる箇所に入れながら調査を続けた。

調査区西端は非常に多量の土器が出土したが、土が粘質でスコップ以外使えず、掘削・土器の取り上げに大いに苦労した。また、調査期間中 2 度の大雨に遭い、サブトレンチや調査区の壁が崩落したり、調査区内の遺物が盗難に遭うなどのハプニングもあった。11 月 17 日調査途中ではあったが、現地見学会を開催した。桑名市では久しぶりの調査であったためか、平日にもかかわらず約 60 人の参加者があり、市民の埋蔵文化財に対する関心を集めた。また、11 月 18 日にも当遺跡近くの桑部小学校 6 年生約 70 人を招き、現地見学会を開催した。

そして、12 月 1 日にはテントを撤収し、無事調査を終えることができた。(渡辺)

第2章 遺跡の位置と環境

西金井遺跡は、三重県桑名市西金井字高添に位置している。当遺跡当該地の桑名市は三重県の北部に位置し、市街地の東側には伊勢湾を望み、北側には岐阜県と福井県の県境の産地を源流とする1級河川揖斐川、長良川が伊勢湾に流れている。南側には昭和61年に朝日町教育委員会によって行われた発掘調査で新聞紙上をにぎわせた縄生廃寺の所在する丘陵が存在し、また三重県の北端にあたる烏帽子岳と三国岳を源とする2級河川員弁川(町屋川)が員弁郡・桑名市を抜け伊勢湾に注いでいる。

当遺跡は桑名市の南部に位置し、その北方には員弁川が東へ流れ遺跡付近で蛇行し南東方向に流れを変えて伊勢湾に注いでいる。この員弁川右岸に形成された標高9～10mの沖積平野に遺跡は立地している。

桑名市内の員弁川流域ではほとんど発掘調査が行われていないが、西金井遺跡は昭和23年に調査が行われた経緯があり、弥生中期と後期、奈良～鎌倉の年代にわたる土器を出土している。

高塚山古墳は西金井遺跡より北方1.5kmのところにあり墳頂部の標高約89mの尾野山の自然丘陵を利用して築かれたもので、そこからは現在の桑名市街、木曽山川流域から伊勢湾までを一望することができる。この桑名市最大の前方後円墳は全長約50mの規模をほこり、円筒埴輪片が数点発見されているが主体部、副葬品についての詳細は不明である。

さらに員弁川左岸の大地には額田廃寺がある。この遺跡は昭和38年に発掘調査が行われたが、その結果、山田寺式の軒丸瓦・重弧文軒平瓦を中心に出土し、法隆寺式伽藍配置で7世紀中葉の年代に相当することが解った。また、同丘陵の東方には西方廃寺が存在し、員弁川右岸の朝日町の丘陵上に立地する縄生廃寺(朝日町)とほぼ同時期に存在したと考えられている。これらの寺院が存在した時期、この付近は交通要所に位置し、壬申の乱の時には大海人皇子が美濃国へたどった道筋にもあたることから、その背景には有力豪族の存在がうかがわれる。

員弁川左岸の七和古窯跡は平安～鎌倉時代のもので、西金井遺跡より2.5km北西の台地状に確認されている。このうち七和2号窯は昭和47年に発掘されており、須恵器・灰釉陶器などが多く出土した。これはこの地域の窯業生産の基盤に大きな指標を与えるものである。

室町～安土桃山時代にかけて員弁川の両岸には多くの城が築かれている。桑名市においても28遺跡に及ぶものが確認されている。中でも西金井遺跡に程近い丘陵部に桑部北城・南城、金井城がある。桑部北城は毛利次郎左衛門が居城した城館で、永禄11年織田信長によって滅ぼされたと文献によって確認されている。これは現在においても土塁と堀が至るところで目にすることができるものである。(水谷)

第3章 遺 構

当遺跡は、町屋川の右岸に位置し、かつては川の一部や氾濫原であったと思われる。また

、地元の人の話によれば、この周辺は戦後、住宅用の壁土として大規模に土取りされているということである。従って、今回の長い調査区では、場所により土層の様相は大きく異なり、層序を場所別に示すと、下の表の通りである。

第1表 調査区内場所別層序表

	西側	中央	東側
I	表土（道路） 旧耕作土	表土（道路）	表土（耕作土）
II	褐色土	褐色土	褐色土
III	暗褐色粘質土 灰色系褐色粘質土	——	暗褐色砂質土
IV	青灰色粘質土 青灰色砂	青灰色粘質土 青灰色砂	褐色砂質土※ 青灰色砂

※第Ⅲ層の可能性もあり

第Ⅱ層は、調査区全域に共通する包含層である。奈良時代から鎌倉時代までの遺物を含む。調査区中央部付近の周囲の水田より一段高く残る農道の土層断面を観察すると、前述の土取りはこの層を数10cm以上の厚さで行われていることがわかる。第Ⅲ層も包含層である。弥生時代中期から同後期の遺物を大量に含む。暗褐色の土の層は西と東側で認められた。東側ではサブトレンチを調査区外南側へ拡張して、暗褐色の層が続いていることを確認している。第Ⅳ層は包含層および旧河道の一部と考えられる。弥生時代中期の遺物が中心である。なお、無遺物層までは掘削できなかったが、第Ⅳ層下位で遺物は少なくなる。

上層での遺構検出は、第Ⅱ層直下または第Ⅲ層上面で行い、調査区のやや西側よりと東端で溝を確認した。下層の検出は、第Ⅲ層暗褐色の土層直下で行ったが、遺構は確認できなかった。以下、検出した遺構について述べる。

S Z 1：調査区西端の北壁際で検出した土器溜りである。甕・高杯など10個体以上あると思われるが、土器溜りの範囲はさらに調査区外北側へ広がっている。遺物が出土した層位は第Ⅲ層の灰褐色粘質土である。また遺物の時期は、弥生時代中期後半である。

S Z 2：S Z 1の東隣に位置する土器溜りである。高杯など10個体あまりが出土した。遺物の出土層位・時期はS Z 1と同じである。

S D 3：調査区を南北に横断する溝である。現存の幅1.5～0.5m、深さ約10cmを測る。

S D 4：S D 3の東隣に位置し、調査区を斜めに流れる。途切れているが、北壁際の溝に続くと考えられる。現存の幅0.5～0.8m、深さ約10cmを測る。土師器皿・須恵器杯など奈良時代の遺物が比較的多く出土した。

S D 5：調査区中央部分を調査区とほぼ平行して、東へ流れた旧河道と思われる。サブトレンチ8～17の断面で肩が確認できた。河道の幅は確認できないが、深さは、深いところ

で1.4m以上を測る。埋土は大きく2層に分けられ、上層からは、奈良時代から鎌倉時代の多種多量の遺物が出土した。下層はサブトレンチによる調査しか行えなかったが、弥生時代中期の遺物が出土している。

SD6：調査区の東端に位置する。現存の幅約1.6m、深さ約0.8mを測る。遺物は小片のみで、時期は確定できなかった。

SZ7：サブトレンチ20を重機で掘削中、調査区外で検出した土器溜りである。広口壺など弥生時代中期後半の遺物30個体以上が出土した。完形品はないが、土器の遺存状況はよい。土器片の間から石鏃が1点出土した。（渡辺）

第4章 遺物

今回の発掘調査では弥生時代中期後半から鎌倉時代に至る遺物が、コンテナケースに約100箱出土した。これらは調査区のほぼ全域から出土がみられたが、そのほとんどが包含層中からの出土であるため、ここでは層位による区分をせずに、一括して取り扱うこととする。

弥生土器（図版6・7）

1～4は高杯。1、3、4は脚部のなかほどに3カ所穿孔される。5、6は太頸壺。5は口縁内面に貼付突起を持つ。6は口縁端部の外面に波状文が施され、口縁内面には扇形文がみられる。7は細頸壺。11は短頸壺。磨滅が激しく、調整等は不明である。12は台付壺。内面にハケメが認められる。13、14も壺の底部。15～17はいずれも甕である。15の台付甕には体部外面にカーボンが認められる。

土師器（図版8－18～31）

ここでは土鍾・鍋など、土師質のものをまとめて記述する。

皿（18～22）はすべてロクロ成形で、底部が突出し、灰白色を呈する。外面底部には回転糸切り痕がみられる。23～26も皿となるもので、口縁端部が内側に肥厚するものもある。内外面ともに磨滅が著しく、ヘラミガキなどの調整痕は観察できない。27は高杯。杯部は欠損するが、残存する脚部にはタテ方向に面取り状のヘラ削りがみられる。28はいわゆる「伊勢型」鍋である。口縁は強く外反し、端部は内側へ折りがえされる。外面にはカーボンが付着している。29～31は土鍾。ほぼ中央に穿孔される。

須恵器（図版3－32～39、図版4、図版5－56～58）

32～34は杯蓋。頂部に擬宝珠鈕の付くもので、口縁端部は内側に折り返される。杯は無台のもの（35、36）と、有台のもの（37～41）があり、有台のものは法量によってさらに分類が狩野である。椀は無台のもの（42～44）と、有台のもの（45）がある。盤は高台の低いも

の(46)と高いもの(47)の両者がある。48～50は長頸瓶。49は頸部に二重沈線が施され、頸部と胴部の接合は、粘度板の挿入される三段構成となるものである。50はいわゆる台付長頸瓶で、肩部に稜を持つ。壺類は頸部の短い、広口短頸壺となるもの(51)と、肩部に耳の付くもの(52)がある。53、54は壺類の底部。54は外面底部に回転糸切り痕が残されている。55はすり鉢。著しい使用痕が観察できる。56は甕。頸部内外面には黄土がハケ塗りによって施され、暗褐色を呈している。57は横瓶。胴部外面には平行状となるタタキ痕が認められる。58は風字硯。外面底部に脚の剥離痕が残る。

緑釉陶器 (図版10－59、60)

59は碗の口縁部。濃緑色に発色する釉がかけられ、輪花が施されている。60は碗、もしくは皿の底部片。濃緑色の釉薬が部分的に認められる。

灰釉陶器 (図版10－61～65)

61は皿。漬け掛けによって施釉薬され、口縁端部には輪花が施されている。62～64は碗、もしくは皿の底部。いずれも灰白色で、胎土は良質である。65ひや広口瓶の底部。淡黄色の釉薬が認められる。

山 茶 碗 (図版10－66～68、図版11－69～75)

66は高台裏に硃殻痕がみられ、内面底部には灰白色の付着物がある。68には口縁部から体部下半にかけて輪花が施されている。高台は比較的高い。69は内面底部にタール状の付着物がみられる。71、72は小碗。72には高台裏に硃殻痕がみられる。70には内面底部にカーボンが厚く付着している。75は鉢の底部片。73、74は胎土に長石粒の噴き出しのみられる、いわゆる「荒肌手」の東海地方南部系のものである。

磁 器 (図版11－76～83)

76～78は白磁碗の口縁部。端部を肥厚させ玉縁状にしている。79、80は白磁碗の底部。前出の76、77の底部と考えられるものである。81は白磁碗の口縁部。端部は上方に挽き出される。釉ガラス質化せず、発色も良くない。82は白磁皿の口縁部。釉の発色は良くなく、一部に剥落している箇所もある。84は白磁皿の底部。

石 製 品 (図版11－84～8)

84は石鏃。粘板岩製で扁平な剥片を研磨、成形している。85は石剣。柄の部分のみが出土している。表面は研磨され、両側からの穿孔が認められる。86は管玉。碧玉製で、ほぼ中央に穿孔され、外面は研磨されている。

このほか、図示していないが、縄タタキの施される平瓦、丸瓦が出土している。(斉藤)

第2表 出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)			出土 場所	出土 層位	備 考
		口径	器高	底径			
1	高坏	—	—	—		Ⅲ	3か所穿孔
2	〃	—	—	11.8	サブトレンチ20	Ⅲ	
3	〃	—	—	12.9	S Z 1	Ⅲ	3か所穿孔
4	〃	—	—	15.4	S Z 2	Ⅲ	3か所穿孔
5	壺	—	—	22.8	S Z 7	Ⅲ	口縁内面貼付突起
6	〃	24.0	—	—	S Z 7	Ⅲ	口縁内面扇形文・外面波状文
7	〃	8.4	—	—	S Z 7	Ⅲ	
8	〃	14.6	—	—		Ⅲ	
9	〃	12.4	—	—	S Z 1	Ⅲ	
10	〃	12.6	—	—	S Z 2	Ⅲ	
11	〃	8.4	10.6	4.6		Ⅳ	
12	〃	—	—	14.2		Ⅲ	
13	〃	—	—	5.6	S Z 7	Ⅲ	
14	〃	—	—	7.8	S Z 1	Ⅲ	
15	甕	—	—	8.2	サブトレンチ2	Ⅲ	
16	〃	12.6	—	—	S D 5		
17	〃	7.2	—	—			
18	皿	8.6	2.9	5.8	S D 5		土師器
19	〃	—	—	4.4	S D 5		〃
20	〃	—	—	4.4	S D 5		〃
21	〃	—	—	4.6	S D 5		〃
22	〃	—	—	2.0	S D 5		〃
23	〃	—	—	—		Ⅱ	畿内系土師器
24	〃	15.2	2.4	10.6	S D 4		〃
25	〃	18.4	3.0	12.4	S D 4		〃
26	〃	18.4	2.6	9.8	S D 4		〃
27	高坏	—	—	—	S D 4		〃
28	鍋	—	—	—	S D 4		「伊勢型」鍋
29	土錘	—	—	—	排土		
30	〃	—	—	—	S D 5		
31	〃	—	—	—	排土		
32	蓋	13.6	3.2	—	S D 4		須恵器
33	〃	14.6	3.0	—	S D 4		〃
34	〃	13.8	2.8	—	S D 4		〃
35	杯	11.8	4.4	6.2	S D 4		〃
36	〃	11.6	3.8	5.0	S D 4		〃
37	〃	13.0	3.6	9.6	S D 5		〃
38	〃	13.4	3.6	9.6	S D 4		〃
39	〃	—	—	9.9	S D 4		〃
40	〃	15.6	6.9	10.6	S D 4		〃
41	〃	—	—	12.2	S D 4		〃
42	碗	12.6	4.6	5.6	S D 5		〃

番号	器種	法量 (cm)			出土 場所	出土 層位	備 考
		口径	器高	底径			
43	椀	12.0	3.6	5.0	排土		〃
44	〃	13.4	5.0	5.8		Ⅱ	〃
45	〃	—	—	5.8	S D 4		須恵器
46	盤	15.6	—	—	S D 4		〃
47	〃	—	—	—	S D 5		〃
48	長頸瓶	5.2	—	—	S D 5		〃
49	〃	—	—	—	S D 3		〃
50	〃	—	—	9.6	S D 5		〃
51	短頸壺	11.4	—	—	S D 5		〃
52	壺	9.2	—	—	S D 5		〃
53	〃	—	—	5.6	S D 4		〃
54	〃	—	—	6.6	S D 5		〃
55	すり鉢	—	—	8.6	S D 4		〃
56	甕	32.0	—	—	S D 5		〃
57	横瓶	11.2	—	—	S D 5		〃
58	風字硯	—	—	—	S D 5		〃
59	椀	—	—	—		Ⅱ	緑釉陶器
60	椀・皿	—	—	6.6	S D 5		〃
61	皿	15.8	3.6	7.2		Ⅱ	灰釉陶器
62	椀・皿	—	—	7.0	S D 5		〃
63	〃	—	—	6.8	サブトレンチ11		〃
64	〃	—	—	6.2	サブトレンチ8		〃
65	広口瓶	—	—	17.0		Ⅱ	〃
66	碗	14.8	4.8	6.2	排土		(山茶碗)
67	〃	17.0	5.2	8.4	S D 5		〃
68	〃	—	—	7.4		Ⅱ	〃
69	〃	16.4	5.0	6.8	S D 5		〃
70	〃	—	—	7.6	排土		〃
71	小碗				S D 5		〃
72	〃				S D 5		〃
73	碗	14.2	5.2	6.4		Ⅱ	〃
74	〃	13.6	—	—	サブトレンチ11		〃
75	鉢	—	—	14.4	排土		〃
76	碗	18.4	—	—	S D 5		白磁
77	〃	—	—	—	S D 5		〃
78	〃	—	—	—	サブトレンチ11		〃
79	〃	—	—	6.4	S D 5		〃
80	〃	—	—	5.6	S D 5		〃
81	〃	—	—	—	S D 5		〃
82	皿	8.4	—	—	S D 5		〃
83	〃	—	—	4.0	サブトレンチ11		〃
84	石鏃	—	—	—	S Z 7		
85	石剣	—	—	—	サブトレンチ20	Ⅲ	
86	管玉	—	—	—		Ⅲ	

第5章 ま と め

本遺跡は員弁川南岸の沖積平野に展開する遺跡である。遺跡の存在はかねてより知られており、地元の方によって表面採集された遺物も少なくないが、本格的な発掘調査が行われたのは今回が初めてである。今回の調査は、排水路埋設による破壊部分、約400㎡を対象とした、小規模なトレンチ上の調査であったにもかかわらず、弥生時代中期後半から、鎌倉時代までの多時期にわたる大量の遺物の出土などの成果がみられた。本章では発掘調査によって得られた新知見と、今度の検討課題や問題点を指摘し、まとめとしたい。

遺構は溝が4条(SD3～6)検出されている。また、弥生時代中期後半から後期にかけての土器がまとまって出土する地点が3か所(SZ1,2,7)確認されている。これらの性格はいずれも不明であるが、後述するように、度重なる河川洪水にみまわれた形跡が土層断面からも観察できる。SZ1,2,7はその際に、何らかの理由で土器が集中したものと理解している。遺物は前述のSZ1,2,7を中心として、調査区のほぼ全域から出土している。遺物の遺存状態は、低地遺跡であるにもかかわらず、良好とはいえない。特に軟質の土器(弥生土器、土師器など)の器表面の調整痕のほとんどが磨滅により看取できなくなっている。これは土器の埋没過程で、水流によるローリングを受けていることに起因するものと考えられ、包含層中の遺物は、本遺跡の立地する沖積層を形成した河川によって上流域から運ばれてきたものが再堆積したものと思われる。

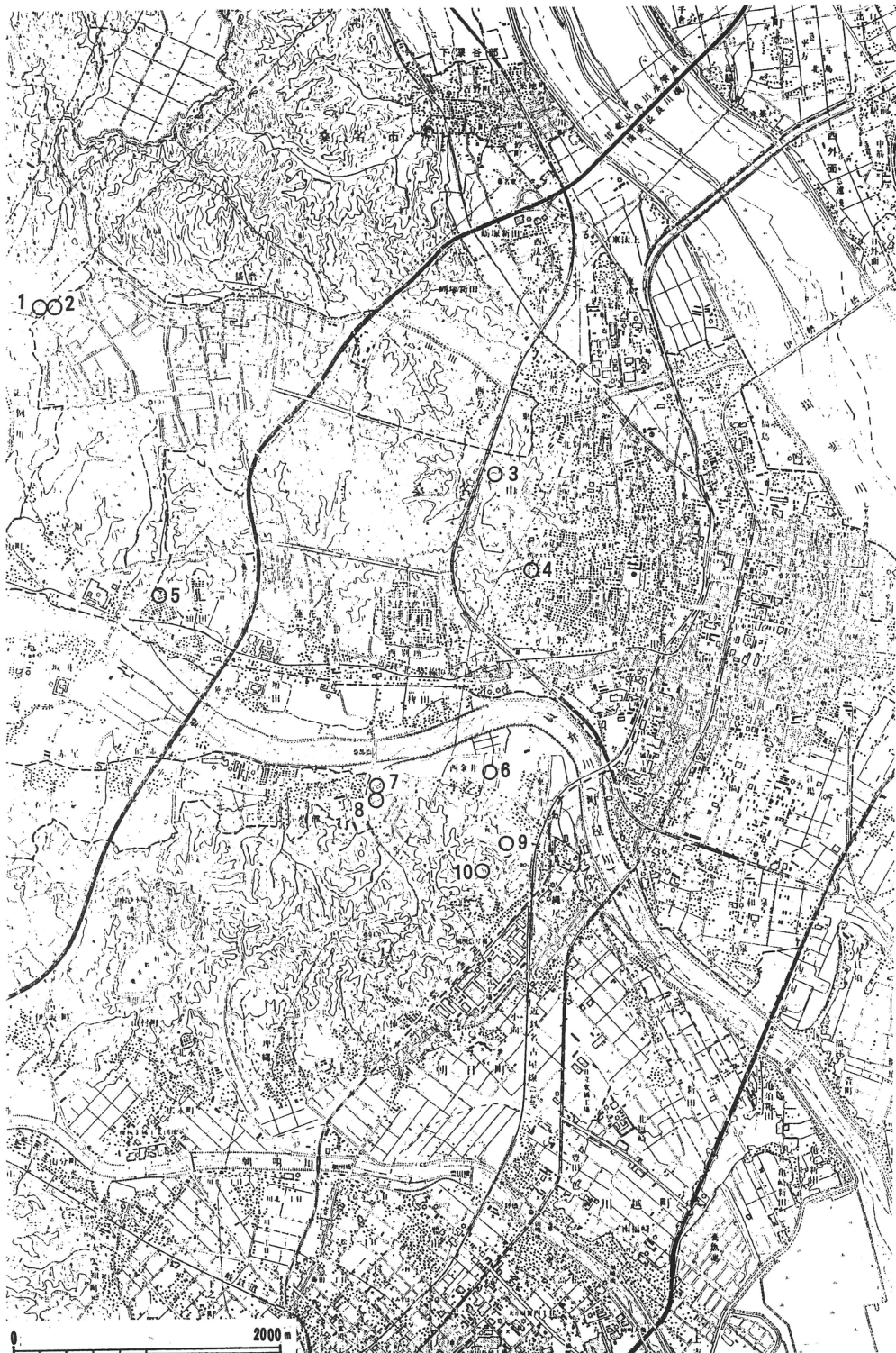
出土遺物で特筆されるものに、瓦・風字硯があげられる。これらの特殊遺物の存在は、調査区の近在、及び上流域を中心とする地域に、寺院もしくは官衙的な性格をもった遺跡の存在が想定されるものである。また、地元の方により表面採集されている円面硯や、ほぼ同時期と考えられる須恵器、畿内系の土師器がある程度の量で出土していることはそれを裏付けるものといえよう。

出土遺物の中で、量的に最も多く出土しているのが、弥生時代中期後半に比定できる土器である。これらはこの時期に近傍で集落が営まれていたことが想定できるものであるが、発掘によって検出された遺構と集落址との関連は、今回の調査では明らかにし得なかった。

以上のように今回の調査は、変則的な発掘区となったことや、発掘面積が少ないこともあって、予期した以上の成果はあげられず、遺跡の範囲も確定できなかった。しかし、少なくとも、発掘調査及び立会調査の行われた範囲においては、確実に遺跡の広がり認められた。今後の課題としては本遺跡の範囲確認とともに、周辺遺跡の分布調査が最も急務と思われる。また、ここでは紹介し得ないが、未発表の表採資料も数多く存在する。それらを資料化し、公開することも今後の課題としておきたい。

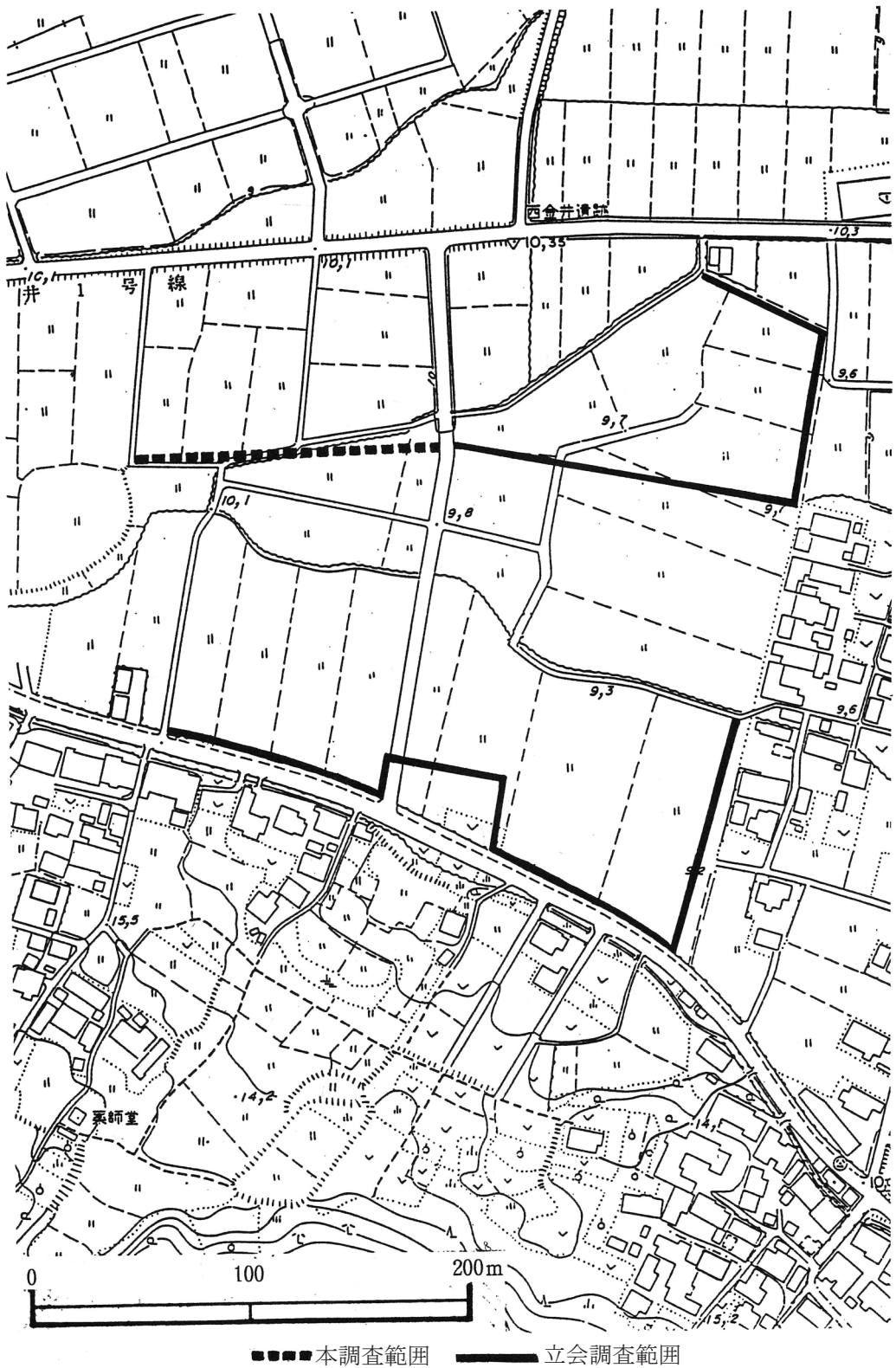
(斉藤)

図版1 遺跡位置図

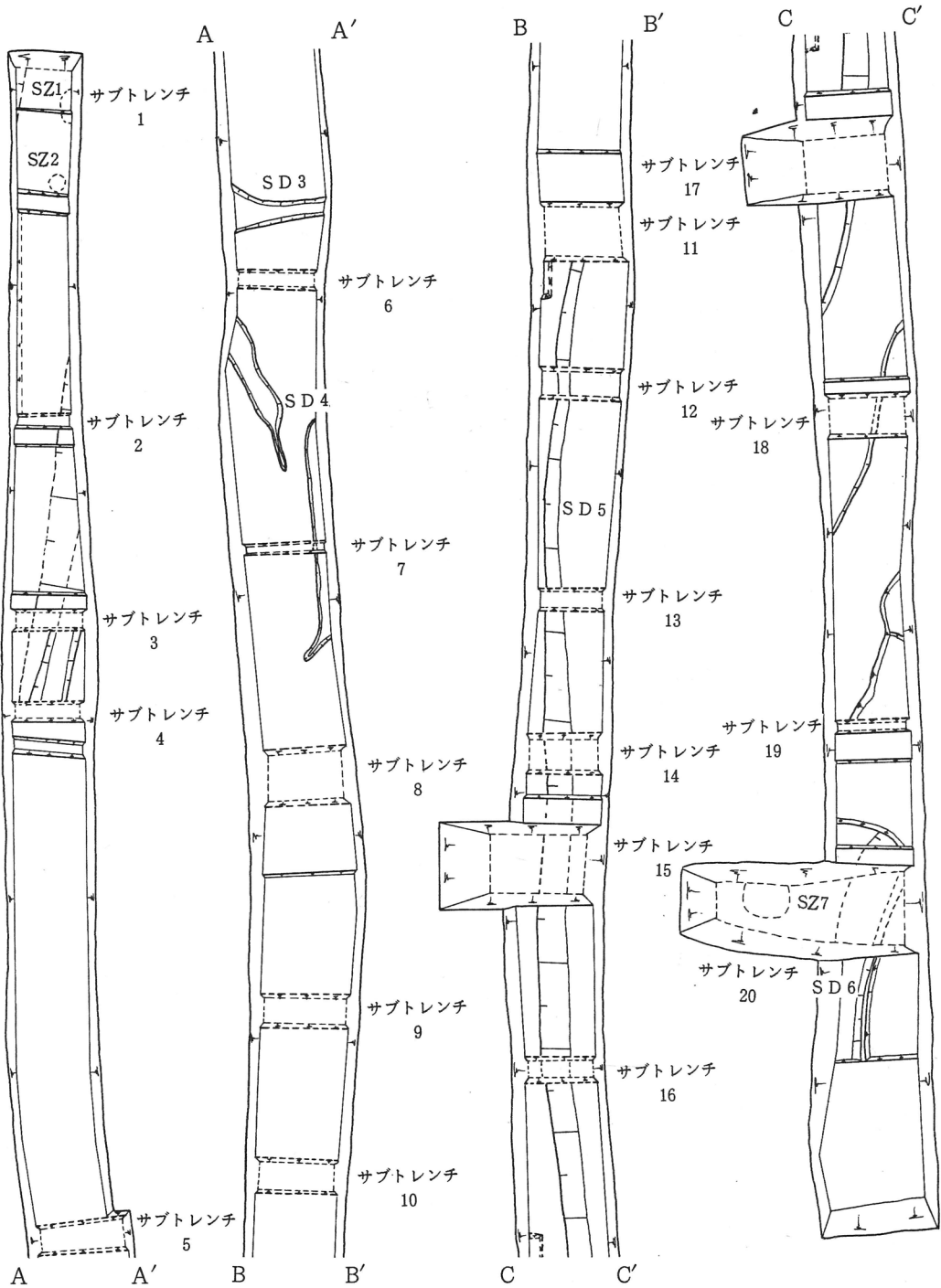
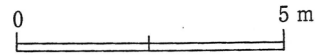


1. 七和1号線窯跡 2. 七和2号窯跡 3. 高塚山古墳 4. 西方廃寺 5. 額田廃寺
6. 西金井遺跡 7. 桑部北城址 8. 桑部南城址 9. 金井城址 10. 縄生廃寺

図版2 遺跡地形図 (1:3000)

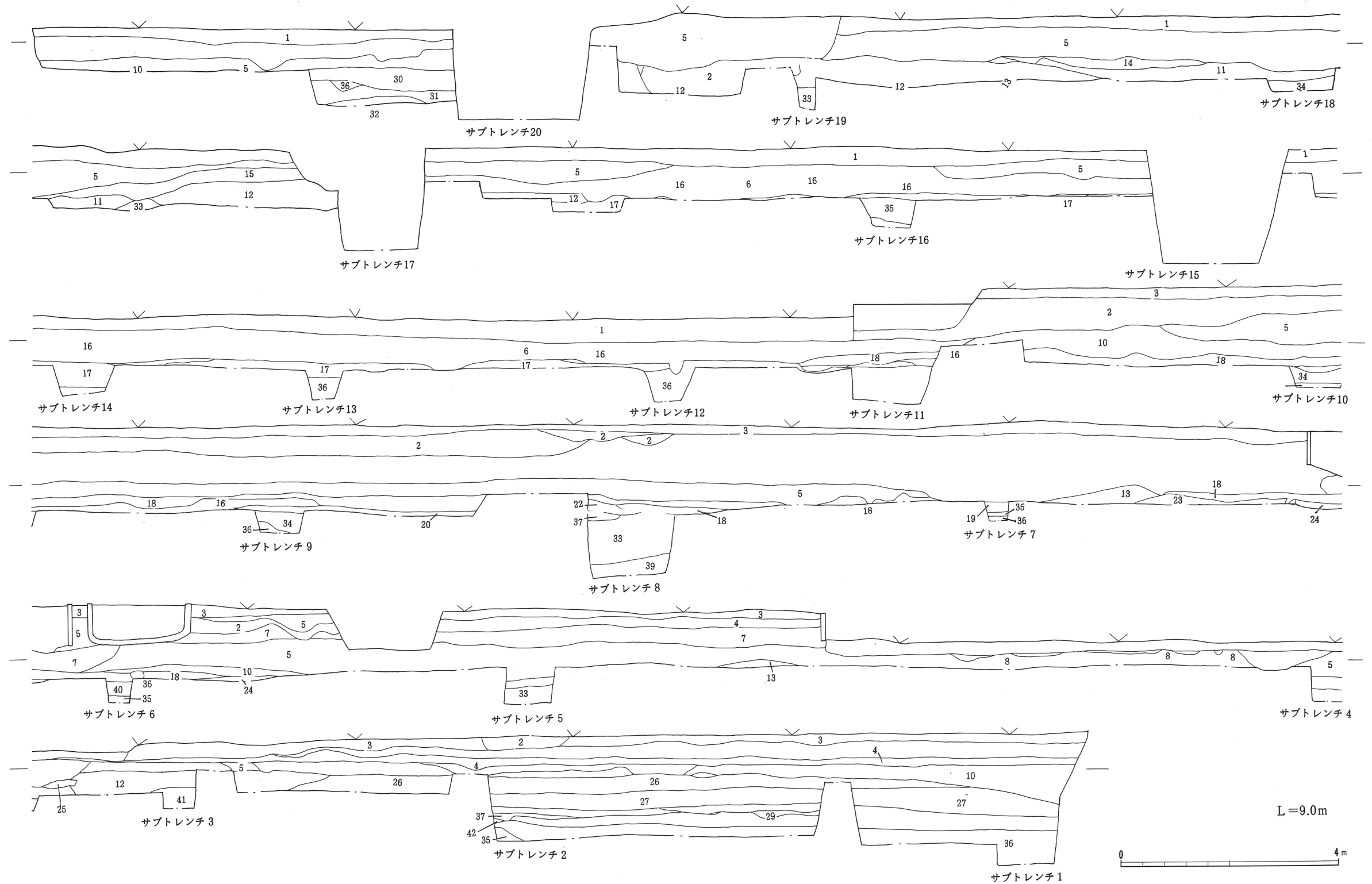


図版3 遺構平面図 (1 : 200)

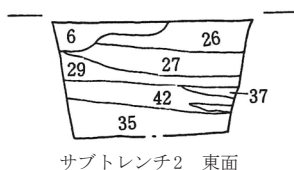


図版4 調査区南壁土層断面図

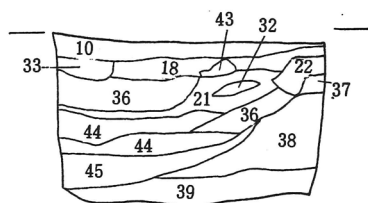
(1 : 80)



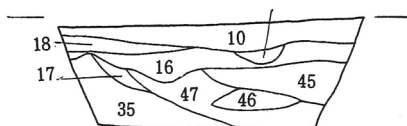
図版5 サブトレンチ土層断面図 (1:80)



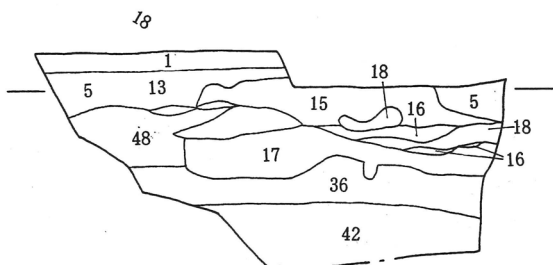
サブトレンチ2 東面



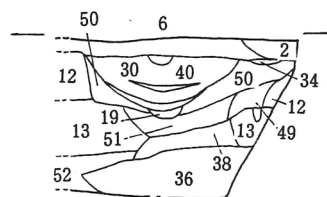
サブトレンチ8 東面



サブトレンチ11 西面

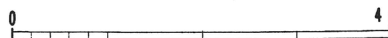


サブトレンチ15 西面



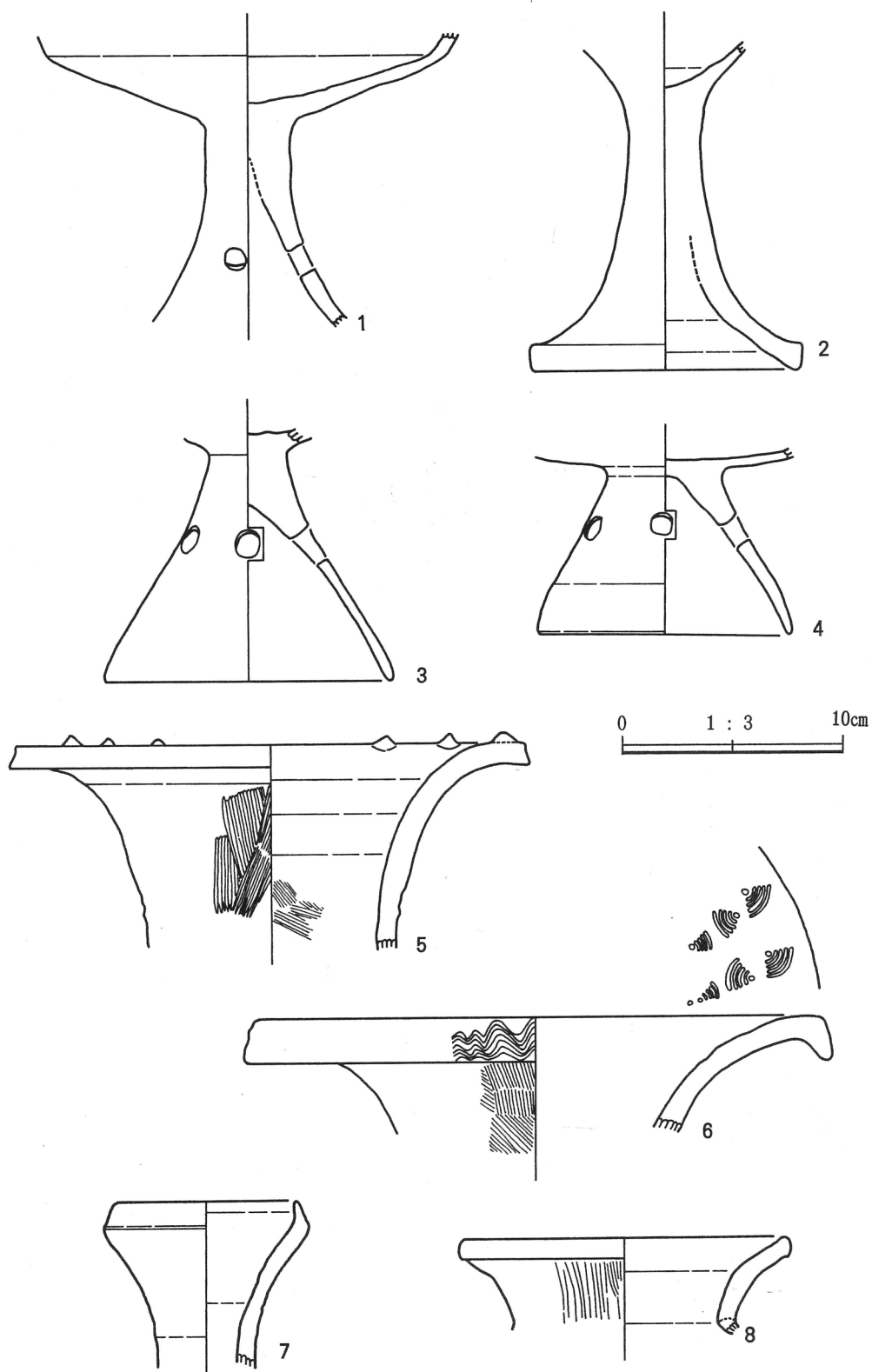
サブトレンチ4 20 東面

L=9.0m

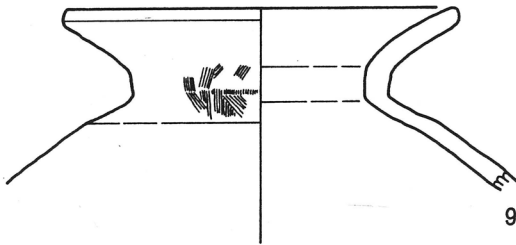


- | | | |
|--------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 表土 (耕作土) | 19. 茶褐色砂 | 37. 明灰色粘質土 |
| 2. カクラン | 20. 21と明褐色砂のまじり | 38. 青灰色粘質土 |
| 3. 表土 (道路) | 21. 灰色砂 | 39. 32と36のまじり |
| 4. 旧耕作土 | 22. 明灰色粗砂 | 40. 褐色砂 |
| 5. 褐色土 (茶褐色ゴマ粒状まじり) | 23. 灰褐色粗砂 | 41. 褐灰色砂質土 (茶褐色棒状まじり) |
| 6. 褐灰色土 (茶褐色棒状まじり) | 24. 明灰色砂 (SD 3・4埋土) | 42. 淡灰色砂 |
| 7. 暗褐色土 | 25. 暗褐色粗砂 | 43. 暗灰色粘質土 |
| 8. 5と21のまじり | 26. 暗褐色粘質土 | 44. 19と35の木片まじり |
| 9. 5と2のまじり | 27. 灰褐色粘質土 (茶褐色棒状まじり) | 45. 36と38のまじり |
| 10. 褐色土 (茶褐色棒状まじり) | 28. 褐灰色粘質土 | 46. 明黄褐色砂 |
| 11. 灰白色砂質土 (茶褐色棒状まじり) | 29. 明灰褐色粘質土 | 47. 19と36のまじり |
| 12. 暗褐色砂質土 | 30. 灰褐色土 (SD 6埋土) | 48. 淡灰色土 |
| 13. 褐色土 | 31. 灰色粘質土 (〃) | 49. 明褐色粘質土 |
| 14. 褐色砂質土 (茶褐色棒状まじり) | 32. 茶褐色粗砂 (〃) | 50. 褐灰色砂質土 |
| 15. 褐色土 (暗褐色小豆粒状まじり) | 33. 褐色砂質土 | 51. 21と37のまじり |
| 16. 19と21のまじり (SD 5上層埋土) | 34. 明灰白色砂 (茶褐色棒状まじり) | 52. 明灰褐色砂 |
| 17. 暗灰色砂質土 | 35. 36と灰白色砂の互層 | |
| 18. 灰色砂質土 | 36. 青灰色砂 | |

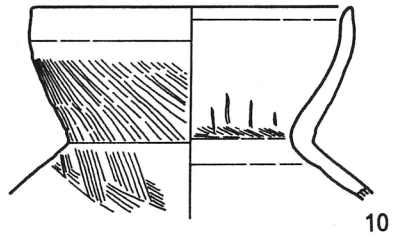
遺物実測図(1)



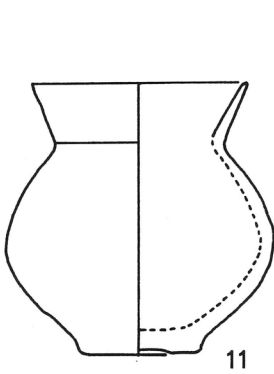
遺物実測図 (2)



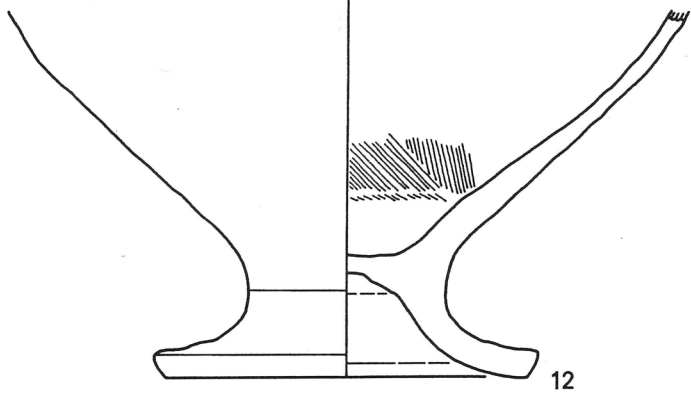
9



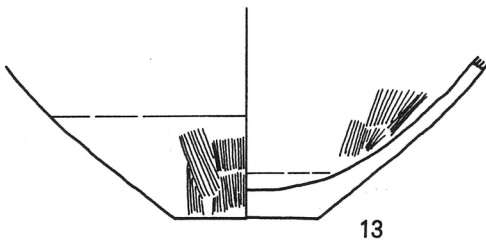
10



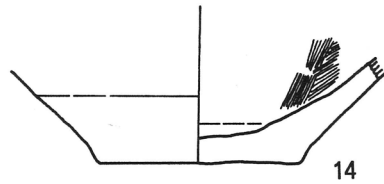
11



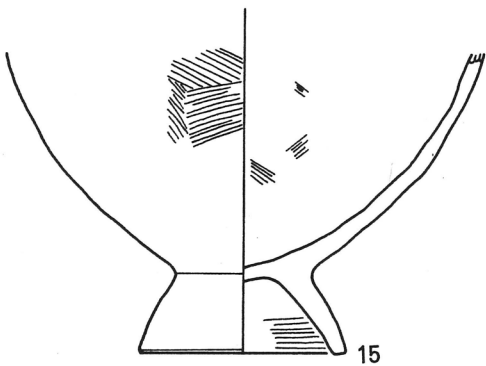
12



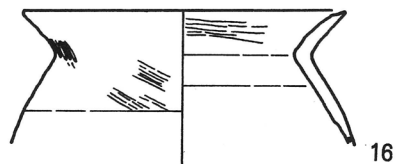
13



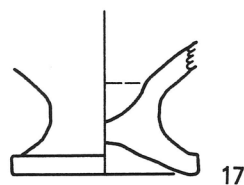
14



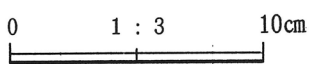
15



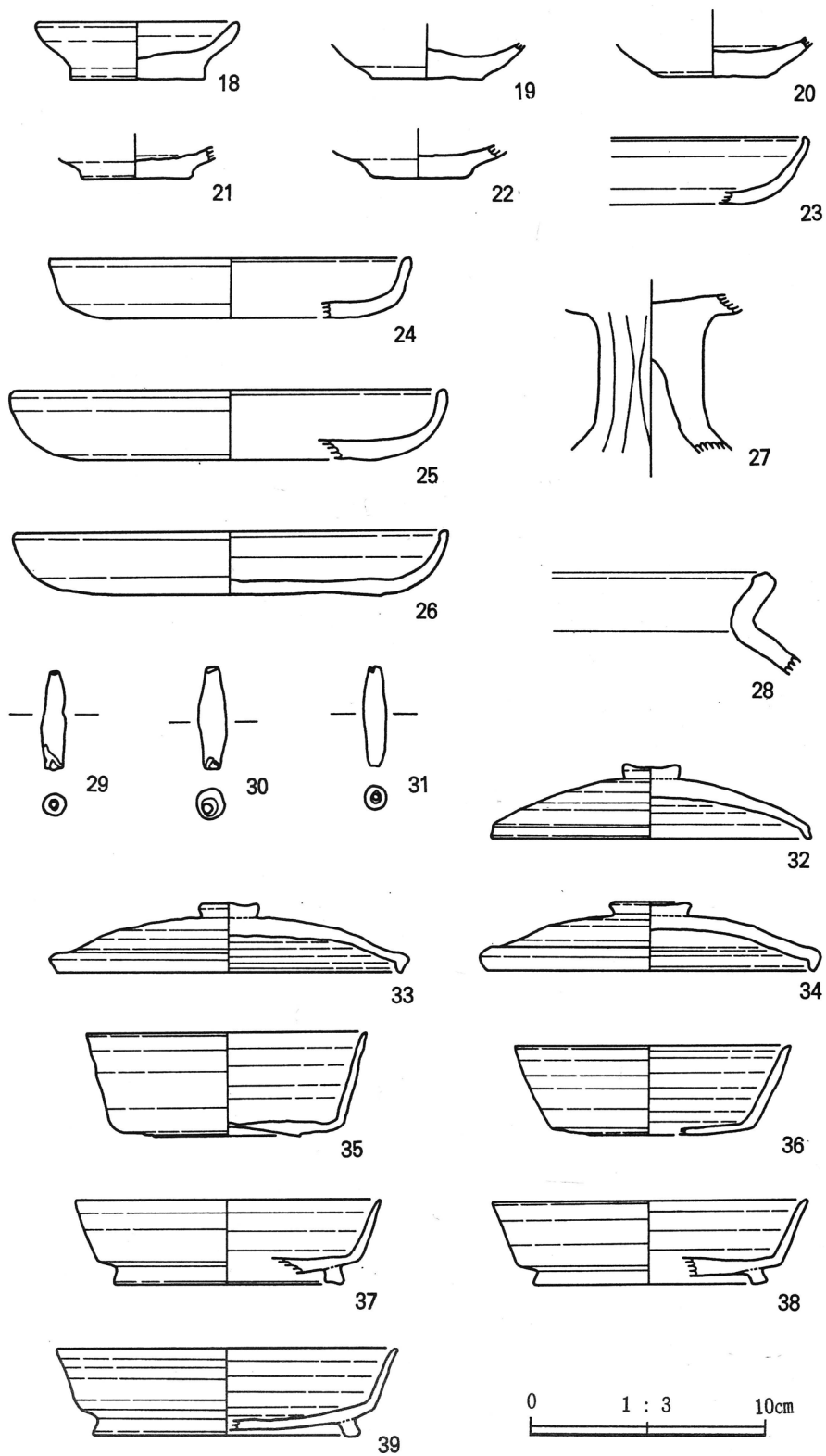
16



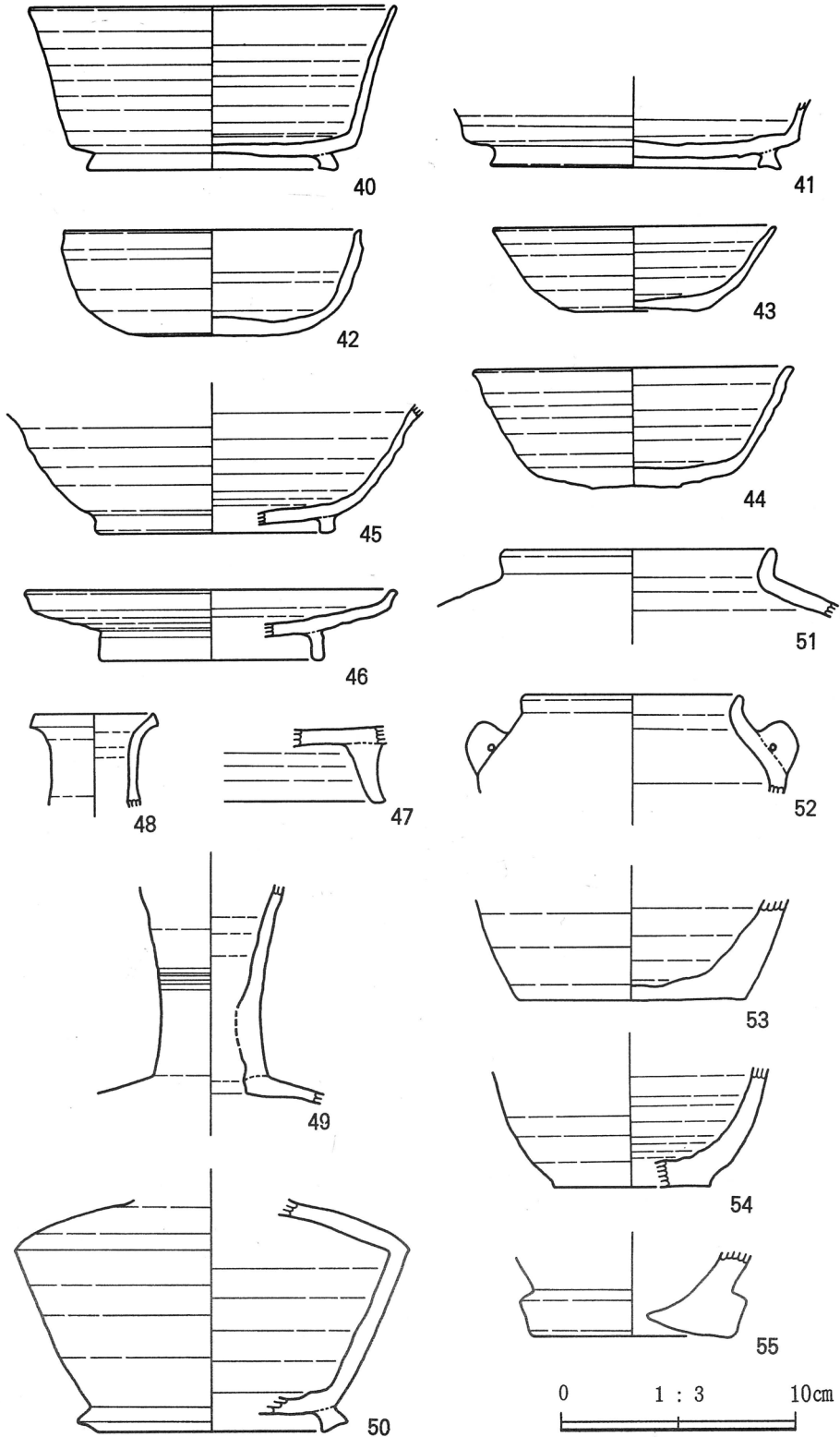
17



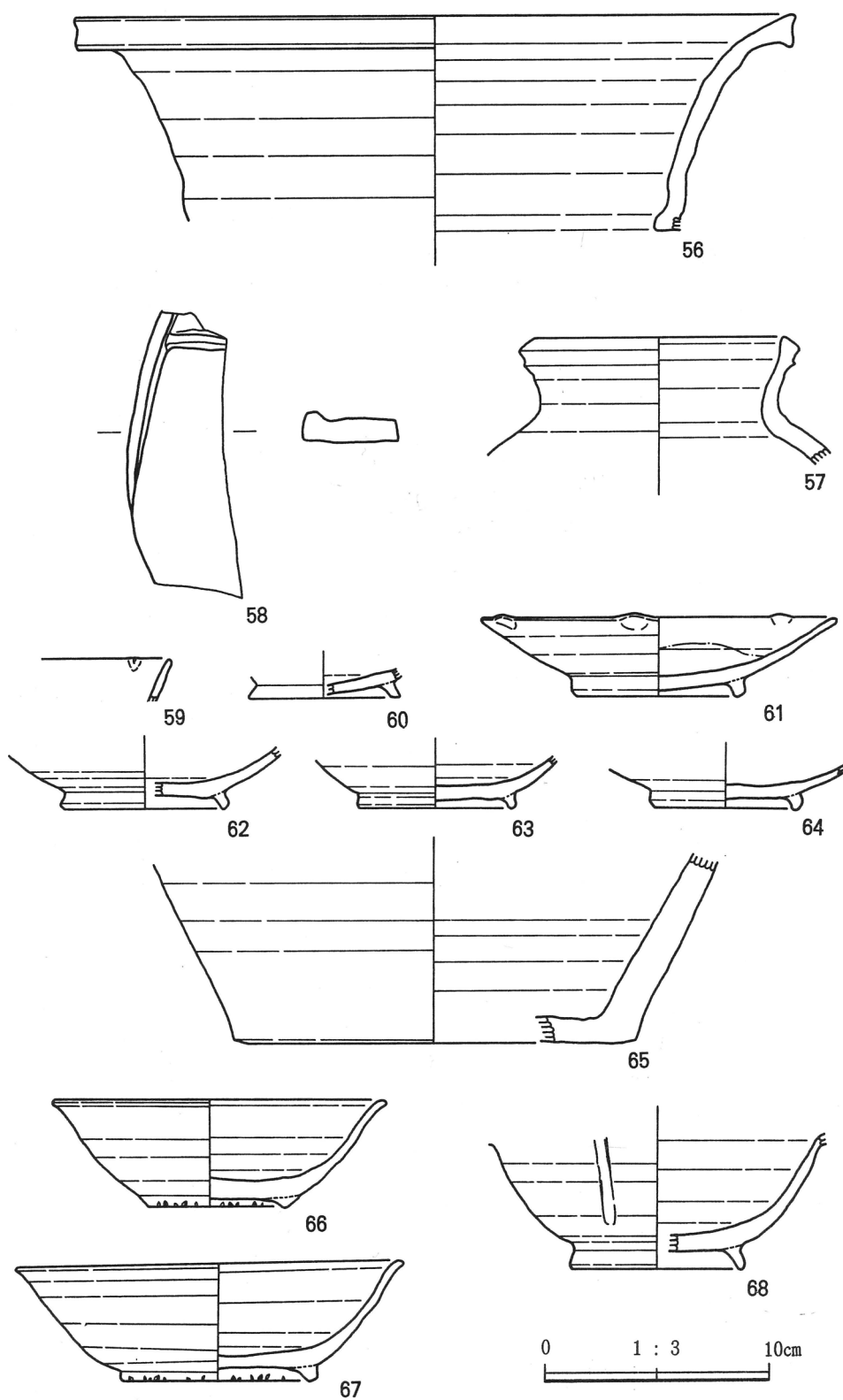
遺物実測図 (3)



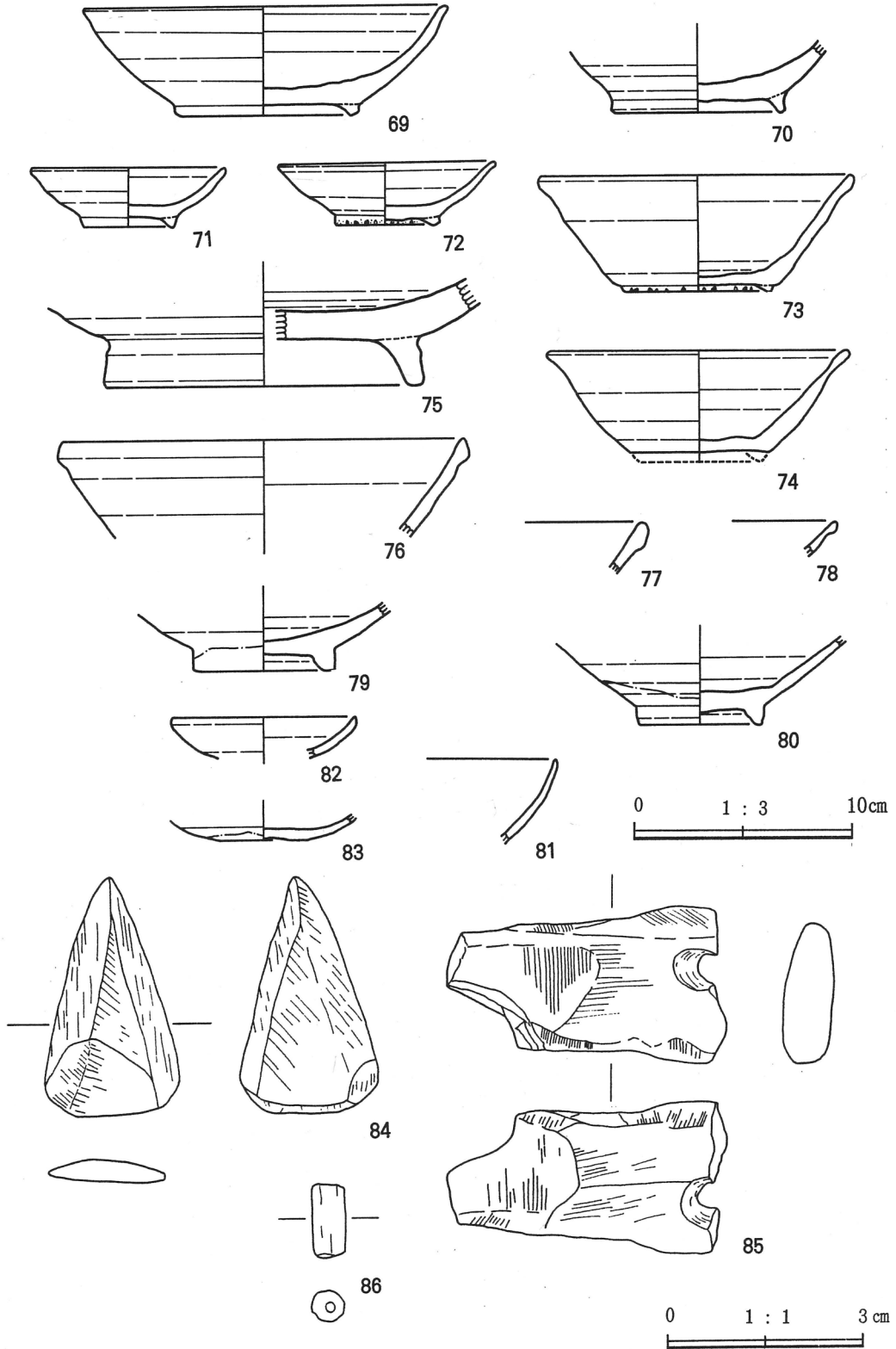
遺物実測図 (4)



遺物実測図 (5)



遺物実測図 (6)



写真図版(1)



調査前近景



航空写真(東から)

写真図版(2)

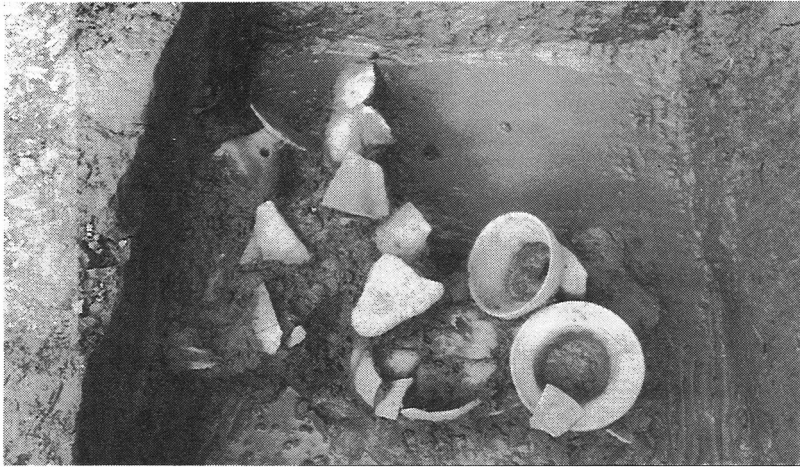


作業風景



SZ1 (南から)

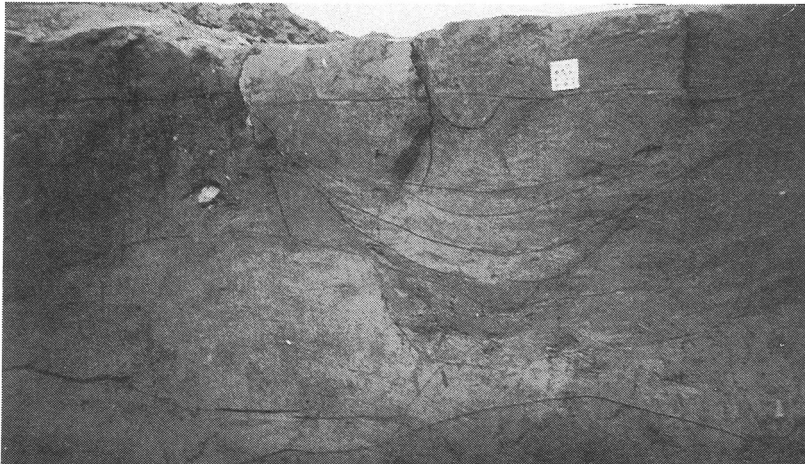
写真図版(3)



S Z 2 (南から)

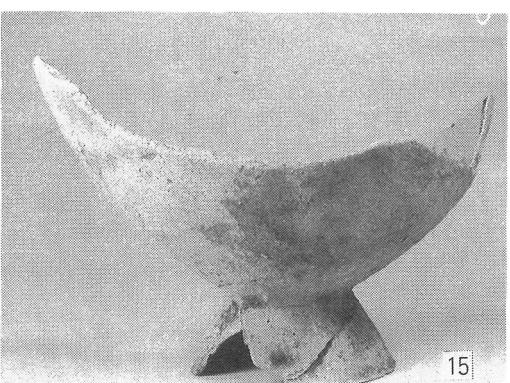
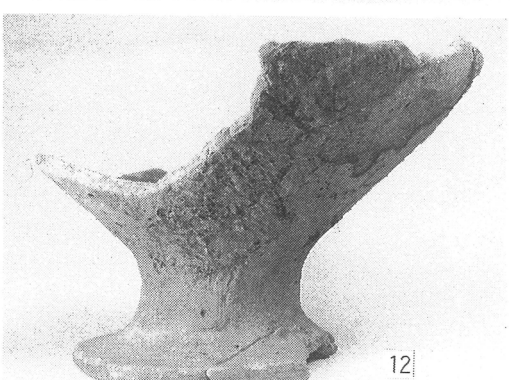
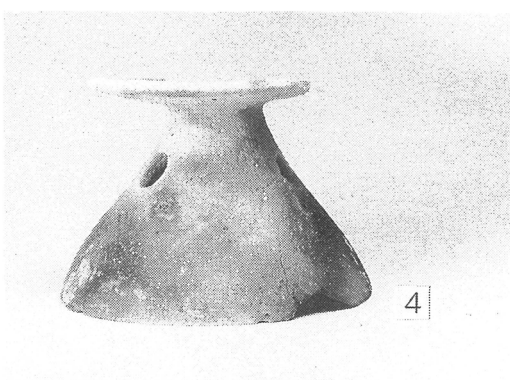
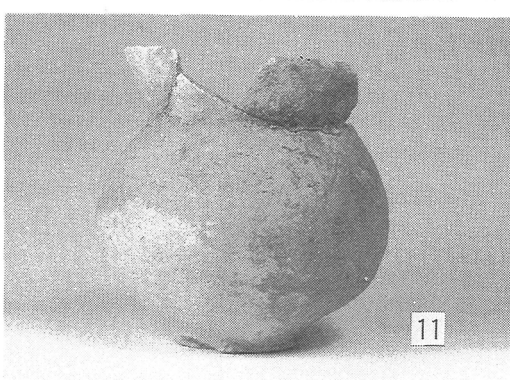
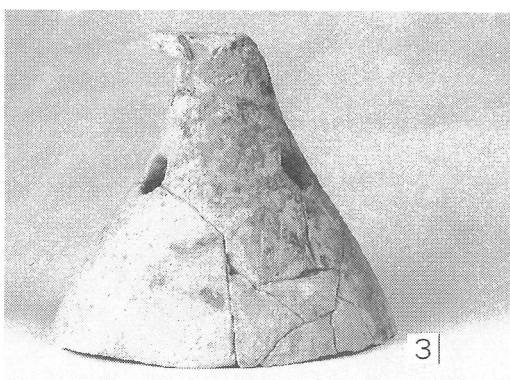
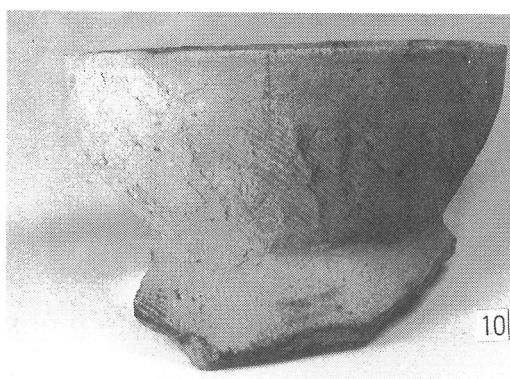
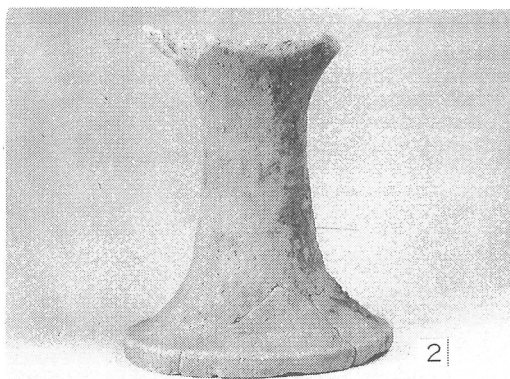


S D 5 上層遺物出土状況

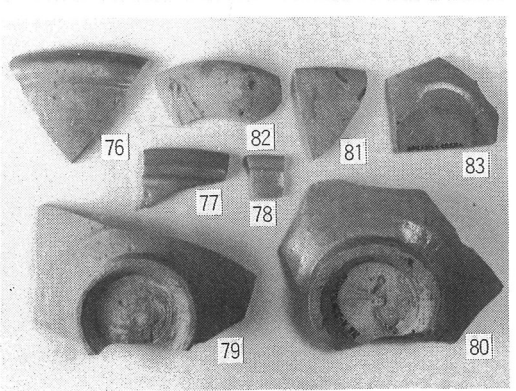
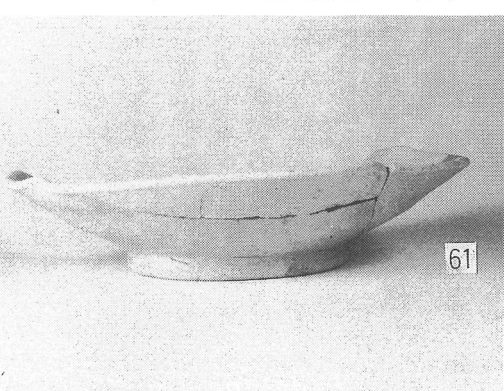
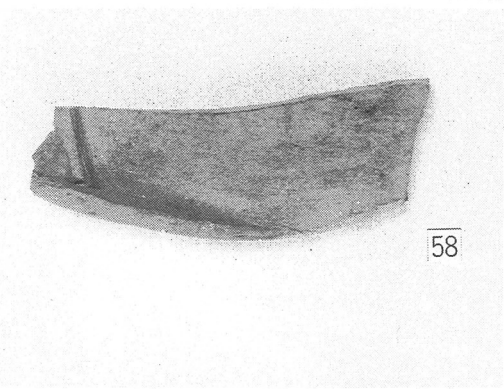
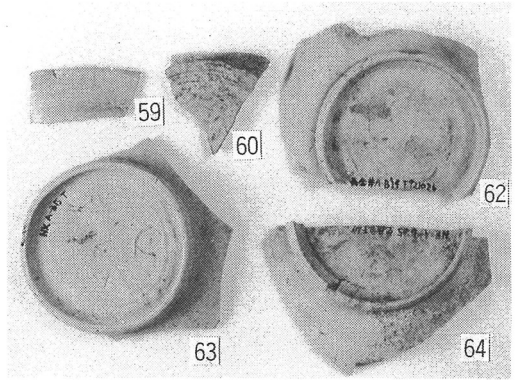
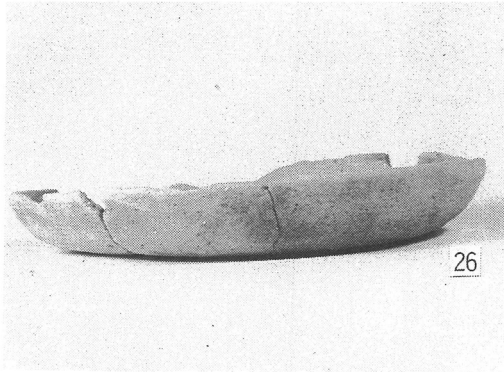


サブトレンチ20西面土層断面

写真図版(4)



写真図版(5)



参 考 文 献

『三重県用水農業水利事業地域遺跡図』（三重県埋蔵文化財報告 2）

1970 年 三重県教育委員会

『桑名市博物館紀要 1』「額田廃寺調査概要」

1987 年 桑名市博物館

『七和 2 号窯址発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財報告 14）

1973 年 三重県教育委員会

『桑名市史』

1959 年 桑名市教育委員会

『縄生廃寺跡発掘調査報告』（朝日町文化財調査報告第 1 冊）

1988 年 朝日町教育委員会

『桑名市文化財地図』

1991 年 桑名市教育委員会

西金井遺跡発掘調査報告書

1993 年 3 月 31 日

編集・発行 桑名市教育委員会
桑名市中央町 2-37
☎ 0594-24-1361

印 刷 アサヒプリントセンター